

# 王 伝統の手技

第九回

その数、数千枚という  
役者や舞いの名手たちの  
型紙が残る大野屋總本店。  
200有余年の歴史の中で、  
足袋づくりの伝統を  
紡ぎ続ける福島康雄さん。

足袋は元々役者など演者のためにつくられたものという。足元の美を求めたため。それが庶民に普及した。伝統の誕生である。



「新富形」として意匠を凝らし、  
「足元をいかに奇麗に見せるか」  
が身上



左上／大正時代からのシンガーミシン。  
右上／大野屋總本店独自の符丁で表す  
足形に合わせた足袋サイズ。  
左下／足袋の生地を打ち抜く金型各種。  
右下／歌舞伎役者・5代目中村富十郎  
丈に収める足袋の生地。注文札に「富  
十郎」の名が。

昔からよく「本当のおしゃれは足元から」といわれるが、これは洋服や装飾品で着飾っても品性は足元に表れる、そんな意味合いも含まれているという。

今回、本誌が訪ねたのは足元を彩る足袋を作って238年の歴史を誇る、東京・新富町の大野屋總本店だ。

明治時代、新富町には「東京一の劇場」と謳われた芝居小屋の新富座があり、歌舞伎座や新橋演舞場へも近いことから、歌舞伎と縁の深い街として栄えてきた。大野屋總本店は地下鉄出口から歩いて数分。角地に立つ大正期の二階屋が目印だ。

「建物は関東大震災の後に建てられたんですが、よくあの戦火にも耐えてきたものだと思いませんね」

そう語るのが、同店の六代目店主・福島康雄さんだ。

足袋は元々役者や日本舞踊家など、演者のために作られたもので、「足元をいかに奇麗に見せるか」が身上。五代目・福太郎氏が考案した「新富形」と呼ばれる同店の足袋は、

「表の生地をたっぶり取り、足

からの年代ものも多く、それぞれの職人さんが自分の使いやすいよう手を加えてあるという。

足袋作りは、流れ作業だ。

「先代の頃は、全工程を同じ人が担当していたんですが、それだとしても上手下手のむらが出てしまうんです。で、同じ場所を同じ人が縫えば、大きな違いはないのではと考えて、以来、いまの形をとるようになったんです」

工程は型紙作りに始まり、裁断、端縫い、と進んでいくが、特に難しいのが爪付けといわれる作業。親指と4本指を包む入り組んだ部分を立体的に、シワにならないように縫いこんでいく。この部分を担当するのは、この道30数年というベテラン職人さんだが、その縫いこんでいくスピードと正確さは、思わず息を呑むほど。足袋の留めとなる、こはぜには店名や足のサイズなどが刻まれているが、一番上は無地になっていて、そこは自分の名前を刻印してもらおうこともできる。通常、こはぜの数は4枚だが、日舞などでより足を細く見せたい、という人には

の甲を包むことで足袋の底幅を狭くして、舞台上足の幅が細く見えるようにしてあります。そのため、つま先の部分のヒダを多くとって指がキチンと入るように入工し、ヒダの取り方もはじめは小さくだんだん大きく波打つようにとる独自の手法を使っています」

大野屋では誂あつらえと既製品、両方を手がけているが、誂えの場合には注文から納品まで1か月が目安。そのため工場内には、歌舞伎俳優の名前が書かれた「予約済み」の生地がズラリ。

「演目によって生地や色、柄などが変わりますが、注文いただいたお客様には、いつも同じ履き心地の足袋を提供したい。そんな思いで、注文いただければすぐに仕事に取り掛かれるようになっていっています」

◇

さて、福島さんに案内され、さっそく工場の中へ。

「舞えば足元、語れば目元、足袋は大野屋新富形」と染め抜かれた暖簾をくぐり、狭い階段を上ると、まずズラリと並んだミシンに圧倒される。大正時代

5枚を、また茶会などで正座する機会が多い人には、足が疲れないよう、数を少なくすることをお勧めしているのだとか。ただ、福島さんいわく、

「足袋選びで一番大切なのは、足のサイズと体のバランス。身長や足の形を考慮して、ぴったり合う足袋を選んでいただけると、心がけています」

◇

福島さんが先代・福太郎氏の後を継いで、六代目となったのは、昭和42年のこと。

「当時は黙っていても着物が売れた時代。大学を卒業して、修業のために大阪の高島屋の呉服部に入り、その後京都に移ったんですが、父の具合が悪くなりましてね。胃ガンでした。で、私が後を継ぐことになったんです」

このとき、福島さんは30歳。

「父がそんな状態でしたから、技術は職人さんたちから学びました。見よう見まねでしたね」

ところが、昭和30年代は破竹の勢いだっただ業界だが、しだいに着物離れが始まり、需要は激減。

# 美 伝統の手技



⑤ 爪先部分からふくらみをつけながら、甲と底を立体的に縫い合わせる。



① 足に合わせて寸法を取り、型紙を起こして裁断する。既製品の場合は重ねた生地を金型を使って裁断する。



⑥ 指先から後ろ部分の甲と底を縫い合わせる。これで足袋の形が完成。



② 裁断した生地にはこはぜを掛けるための糸を通し、縫い付け、表地に通した掛け糸が、こはぜを掛けたとき動かないよう、糸を通した端を縫う。それから外甲になる生地にこはぜを縫いつける。



⑦ 返し棒と呼ばれる木の棒を使って足袋を表に返し、裏表をなじませる。



③ 外甲と掛け糸を縫いつけた内甲を裏地と合わせ、上の部分を縫い付け、ひっくり返す。



⑧ 足袋を木型に入れ、つま先を木槌で叩き、縫い目をやわらかくしていく。



④ 外甲と内甲のかかどにあたる部分を重ね合わせ、円形に縫い尻止めをする。



⑨ 最後にアイロンがけをして完成。



**福島康雄**  
Fukushima Yasuo

1937 (昭和12) 年東京・新富町生まれ。子供の頃から、「絵を描くのが好きで将来は絵描きになるのが夢だった」。2階が自宅兼工場だったこともあり、物心ついたときから仕事場が遊び場だった。1959 (昭和34) 年、成蹊大学政経学部卒業。百貨店の高島屋に就職し大阪、京都を回る。1967 (昭和42) 年、父の福太郎氏が病気のため死去。6代目を継ぐことに。折からの着物離れで業界自体が衰退していく中、伝統を重んじながらユニークな発想を駆使し「色付きの足袋底」はじめ、オリジナル商品を次々に開発、大野屋總本店の暖簾を守り続けてきた。「工場での顔は厳しい足袋職人」(恭子夫人)。だが、仕事を離れば大の趣味人で、歌舞伎の「助六由縁江戸桜」では「河東節」(かとうぶし)で舞台上がる。また、「通勤がないので足を鍛えるため」と始めた社交ダンス歴はすでに10年。陶芸にいたっては20年のベテラン。ちなみに恭子夫人は、フラの伝え手でもある。  
大野屋總本店 東京都中央区新富2-2-1  
TEL: 03-3551-0896

※新富座は、1876 (明治9) 年の火災により新富町4丁目に仮劇場を設営したことに始まる。その後、明治11年に近代劇場として蘇り、リットンの戯曲『Money』を翻訳した『人間万事金世中』や、ウエルソナー座を招いて『漂流奇談西洋劇』などを上演。1888 (明治21) 年に新設された歌舞伎座とともに明治の歌舞伎黄金時代を築くが、関東大震災による被災後、そのまま再建されず廃座になった。

れているが、「それがうちの財産ですね」と福島さんはいう。そんな福島さんとともに工場を切り盛りしてきたのが、妻の恭子さんだ。恭子さんは、都内にある有名老舗料理店のお嬢様で、46年前に結婚。以来、夫唱婦随で歩んできた。

「主人の性格? そうですねえ、普段は天真爛漫という感じの人なんです。いったん仕事場に入ると、顔つきが変わりますからね。足袋に対する思いは昔もいまもまったく変わっていない。そんな主人を尊敬しています」

夫人の言葉に、ちよっぴり照

れくさそうな福島さんだが、大野屋は現在、夫人と長男夫妻のほか10人の従業員によって賄われている。

作業中、ふと布が被せてある一台のミシンが目についた。

「このミシンはね、息子に残してやろうと思いましたが」

七代目の茂雄さんは商社を退職。現在は、東京を離れ修業中だ。

一台の名機とともに受け継がれていく伝統の手技。ミシンにそっと手を置く福島さんの眼鏡の奥の瞳が、優しそうに微笑んだ。



すると、

「都内に800ほどあった足袋店も、気が付くと4、5軒になっていて……。中国やベトナムからの輸入がどんどん盛んになり、このままでは薄利多売の商品に太刀打ちできなくなるのでは、という危機感もありましたね」

なんと大野屋だけのオリジナル足袋はできないだろうか。福島さんが考案したのが、色付きの足袋底だった。

「足袋底といえば昔から白、というのが相場だったんですが、染料がよくなったおかげで色落ちしなくなりました。で、これはいけるんじゃないか、と」

それが、大野屋總本店の武器になった。さらには式典用に宮内庁に納める羽二重の紐足袋や、身障者用の足袋、また手のひらサイズの福足袋など、「伝統」を重んじながらも、新たな発想で付加価値を追い求めた。

と、同時に店を支えたのが、大野屋の足袋を愛してやまない役者や舞台人たちからの変わらぬ支持だった。店の棚には、現在もその数、数千枚という役者や舞いの名手たちの型紙が残さ



舞えば足元  
語れば目元  
足袋は大野屋新富形の  
暖簾に心意気が